

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成 18 年  
4 月 号

毎月 23 日 発行  
通巻 428 号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成 18 年 4 月 23 日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町 1 の 12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 250円  
年間購読料 3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



金剛界曼荼羅



胎藏界曼荼羅

両界曼荼羅図 大阪府豊中市 森脇聖淳さん画(文・7頁)

昭和37年 4月23日 月次祭法話より

## 社会に対しての思いやり

法主 矢追 日聖 (51歳)

土地を社会に提供する心

今月の八日、すさのお祭の時には、丁度吉野桜が咲いておりましたが、今日は良いお天気でもう汗が滲む程で、八重桜とツツジが花盛りです。自然界というのは、わずか半月経つか経たない内に、これだけの変化を示しておるんですね。

すさのお祭りの時にも、「寸紗の緒」(「壁土にまげてつなぎとする繊維質の材料 広辞苑より」という言葉で説明しましたが、信仰する者、一つの宗教を持つ者の中で一番大事なことは、調和の精神、人の心と心の結びであり、精神的な融和なんです。

まあ日本人の欠点であるかも知れませんが、割合に自分達とか自分だけのことはよく考えるんですけども、他人のことについては冷淡な気持ちの人が多いいですね。これは根性と申しますか、長年の国の習慣から出て来たことだろうと思ふんです。

幸福な人生を送りたいと願うのは、これは誰も同じだろうと思います。しかし、我々が社会の一員である以上、社会全体が不幸になれば自分も不幸になる。だから、いつも申し上げるのですが、他人も幸せにいくようにと祈る気持ちがなければ、自分の幸福もあり得ないんです。

まあ実際問題としては、非常に難しいですけども、一歩一歩そういうような心境に近づいてもらうことに、信仰する者の徳というものがあるんです。

今日はこちらの大本宮の方の都合で、お祭りの時間が一時間ばかり遅れまして、どうも濟まない次第なんです。それは皆さんが今ご覧になったように、柿の木とか梅の木とかを、朝の早うから家の子達が、畑から大本宮の中に移植してくれたからなんです。その訳をこれから話します。

大倭安宿苑の百メートルほど南側にある、五反程ですから千五百坪余りのその畑は、幸いにして私個人の所有になっておりますので、売ろうとどないしようとかこちらの自由になるんです。そうした法の精神に感謝し、この土地を何か有効に使いたいと思つて、社会福祉協議会や県の厚生課の方々に、福祉の為に提供しようとか数年前から話しておつたんです。

今、奈良県内には、精薄児の施設は柳生のお寺でやつておられる一箇所がございますが、該当者から見れば非常に足りないということなんです。また、柳生という場所は地理的にも割合に不便で、子供の職業指導や教育をしていく上に、あまり恵まれていない環境ではないんですね。そんなところから、奈良県にもう一つ精薄児の施設を作りたいという話しを聞いておりました。

今年になりましたから、県の方も積極的に動くようになりまして、児童課の方々とか、私もはっきり知りませんが労働厚生部と言ってますか、その吉田部長とも再々会つて意向を聞きました。それならこの際この土地を提供して、そうした施設を造つてもらえば、私も非常に幸せであり、この土地も永久に生きるんです。

## 揺り籠から墓場までの福祉センター

この大倭安宿苑の一面は、光明皇后の息の掛かつておる所でございます。光明皇后の慈善事業

は、今で言えば、いわゆる社会福祉事業なんですね。その精神を生かすのに、人間がホギヤツと生まれてから死ぬ時まで、言い換えれば揺り籠から墓場までの一つの福祉センターを造りたい。この地区を中心として光明皇后の慈善的な気持ちに報いたいというのが、私の念願でもあるんです。そういうような意味のことも、かねがね県の方にも話しておつたんです。

そこでこの間、決定的な返事を聞きまして非常に喜んでおるんです。今朝の読売新聞の奈良版でも、この六月からいよいよ着工するということが発表されております。定員は五十人ですけれども、ここで生活させながら学問や職業を教えるという、精薄児にとつて非常に結構な施設になるわけでございます。

こちらの気持ちと県当局の気持ちが一一致し、土地は私の方から提供する、建物とか設備一切は奈良県立で造つていくという関係で、その精薄児の施設がいよいよ発足することになりました。

ということは、宗教的にも因縁論から考えてみても別に不思議なことではないんです。人間として邪な<sup>よこしま</sup>ことではなく、人の幸福或いは社会福祉に關しての善意の気持ちを持つておつたとしたらね、いつか時間が来れば、それが現実として現れてくるもんだと、私は自信を持つておるんです。

以前からこの土地のことは、いろいろな方がお見えになりました。例えば、老人ホームを造ろうやないかとか、或いは病院のようなものを作らどうかとか、要するに人の為になるような仕事です。私は社会福祉の問題であれば、いかなるものでも受け入れており、どなたがおいでになつてもこれを拒まず真面目な気持ちで話し合ひしておつたんですけれども、どういふような加減か、相手の方からその話しは立ち消えになつてしまふ。

ということはずね、我々のこの真面目な気持ち、光明皇后のお気持ちに添わない、言い換えれば神意に添わない仕事だということなんです。名目は非常に結構であつてもずね、やはりそこに経営する人の精神状態が現れてくる。美名のもとに営利を目的としておつたのかも知れない。

ところが、この精薄児の施設の話だけは、もうとんとん拍子に進んで参りまして、これが神様の心に添つた施設であるということが、結論から見て言えるわけでございます。

この土地はゴルフ場の近くだし阪奈道路沿いだし、俗的に言えば将来値打ちの出るような場所です。そのような土地であるのに、このような施設に提供するという私の気持ちについて不思議に思う人もあり、問い合わせに来る人も今日までちよいちよいあつたんです。

そのような人達にも、私はいつも教えてやるんですが、土地というものは自然にあるもので、この土一つ私達人間が拵えたのではないんですね。土地があつて、草とか木とかがあつて、そして犬とか猫とかと同じく、この地球の顔の上に我々は湧いて来たんです。

## 死んでも喜びの持てる人生

土から湧いて来た我々動物がね、その土地を掴まえて、自分のものであるというふうなことを考えるのが、根本的に誤つておると私は思うんです。

言い換えれば、自分が生きておる間、この土地の上に住まいさせてもらつておるだけなんです。法的権利は人間同士の約束なんです。この土地は誰々に所有権があるんだと定めておるだけで、これは空のもの、影のもの、生きておる間のものであります。

土、土地は永久にありますけれど、人間はまあ百年も生きれば上々なんです。自分の財産だ、自分の土地だと気持ちでは思っておつても、死ぬ時には、その土地は一つも持つて行かれない。あべこべにその土の中へ我々の死骸は放り込まれる。土から湧いて来て、また土に還つてしまふ。これが我々の現実の姿なんです。そういうようなことも考えてみてほしい。

幸いにしてこの一画とか、これだけの山林或いは畑というものが、矢追日聖のものであるという所有権が与えられております。すると世間の人もそれを認めて、私の権利のある土地の範囲に、鋳を入れたり盗みに来たりしない。この法的に守られた土地が持てるという徳が、ご先祖と言いますか自分にあるんだと私は考えておるんです。

だから今度は、その自分に与えられた徳というものに報いる行いをしなきゃいけない。法でもつて守られたこの土地をですね、その法の精神に則つて有効に使わなければ恐れ多く勿体無い。だから、それを社会の誰かが喜ぶように使うところに、私は所有権の価値があると思うんです。

仮にその土地を売つて、五百万とか一千万とかの金を貰つたところがですよ、その金を持って死ぬわけにはいかない。その金は、子供とか孫とか、誰かがまた使うだけの問題です。なまじつか、そういうものを残しておくことは、いろんな意味においての罪というものを作る原因となつてくる。

私は自分の所有になつておる土地は、私の目の黒い間に全部有効に処分して、裸になつて死んで行くとか覚悟しているんです。この大本宮の土地も私個人の名義になつておりますけれども、この所有権というものは、宗教、要するに人を幸福に導いて行くために有効に使つてもらふところに効力があると私は信じておるんです。

今でも、その五反の畑に野菜物とか麦、サツマイモ、柿というようなものが植わつておりますから、一年間にある程度の収益はあります。けれども、こんなものは死ぬまで作つておつたところが、わずかの収益です。それより自分が死んでも、その土地によつて一つの喜びを持てる人生を私は持ちたいんです。

精薄の子供達が段々と伸びていつてくられて、社会復帰出来るとか、自分で仕事が出来得るような人になつてもらつた時に、私の喜びというものが生まれて来ます。私が死んだ後に於いても、そうした喜びは永遠のものであると、私は今から信じておるんです。

そういうような考えの元に土地を提供したので、私はその土地に対して何にも執着をしていません。

これは口先だけではないんです。私自身の本当の気持ちを申し上げているんです。我々は、今こうしておつても、一時間もすれば死ぬかも分からない。地球の上に生まれて来た以上、いつか死んで行くんだということは決定的問題なんです。それさえ分かつておればね、そうたいしてえらい欲も要らないと私は思うんです。

### 神ながらの味

で、願わくばですね。世間の人達も、そのような気持ちになれとは言いませんけど、なつてほしいと希望するんです。そうした時に、世の中というものがもう少し楽になり、思いやりのあるような社会が出来やせんかと私は思うんです。

だから、そういうような精神の人間を、我々はやはり宗教とか或いは信仰の力によつて一人でも多く作つていかなければいけない。ただ自分個人

の私利私欲を願うような意味の信仰であれば、これはもうやめた方がよろしい。これは信仰する価値がないんです。

神様仏様に手を合わせるということは、この宇宙の大法則、神様仏様の道に全面的に帰依し、その理想とするような社会を目指し、理想とするような人間に自分が努めてなりますという意味に於いて拝むんだと私は思っているんです。

大倭に於いて信仰されておる方には、今日まで耳がタコになるほど申し上げておるんで、別に耳新しい話しではございませんから、話しは誰でも分かつておると思うんです。

実際問題として、そういうような心境になれるかと言えば、おおよそ「言うは易く、行ふは難し」でしょう。けれども、たとえ一歩でも進歩していけば、同じ話を一年後に聞いた時には、その味というものがまた別なものであるんです。

さて、こういうような話しをして、何人がこれに共鳴してくれるんでしょうか。そういう無欲なことをやっておれば、今の世の中食つていられないとか、生きていられないとか、頭から言われる方が多いはずですよ。

けれどもですよ、私自身がそうした生き方で今日まで参りましたけれど、まだ死にもせずここに現存しておる事実をですね、よく見てほしいと思つておるんです。ただ目玉で見るんじゃないで、心の眼を開いて見てほしいと思つておるんです。

必ずこうした時に、我々が願わなくつても天のお助けと申しますか、いわゆる因縁と言いますか、とにかく決して悪くは行かないんです。都合良く行くように自然になつてくる。いわゆるこれが口で言えないところの、神ながらの味なんです。

私はもういつでも死ぬということを前提として物事を考えております。これも今言う、味の問題

なんですがね。今は、形こそ大人しく冬眠しているような状態にありますけれども、なかなか若い人に負けないだけの気力を持っているんです。今の言葉で言えば、ファイトを燃やしているんです。

## 自己修養から社会福祉精神へ

少々どんな事が起こって来ても、自分が死ぬというだけの自覚さえあれば、動ずること、恐れることはないんですよ。

自分の使命の上に於いて死ぬ場合は、今ここで倒れても、何一つ悔ゆることはありません。

ただ、いわゆる犬死にはしたくない。例えば雷が落ちて死ぬ、或いは自動車事故で命を放るとか。そりやもう因縁であればしょうがない、運命ならば仕方ありませんが、犬死にだけは恐れるんです、怖いんです。だからして、車一つ乗るにしても、普通の人以上に私は気を付けており、運転する者に対してでも、やかましく注意をするんです。端から見れば、「えらい怖がりだ」と思うかも知れませんが、仮に車の中で死ぬべき因縁や運命でなくて百まで生きる命を貰っておったとしても、何かの時に不幸にして五十くらいで命を絶つような場合が、たまには起こってくるんです。

世の中には瞬間的な、魔が差すというような変態的な動きがあるんです。例えば、雷は大体夏の夕立に付きものですけれども、冬とか正月に鳴ったり、春に大きなのが落ちたりするような例も過去に沢山あるんです。だから、自分の使命に殉ずる場合は、喜んでどうなってもよろしいけれども、それ以外のことに於いては運命任せでなく、やはり私は人一倍自分の体を大事にし、自分の命を惜しむんです。

私は家の子達が病気でなると、精神状態が良

くないんだといつも言うんです。世間では普通、人の物を盗んで来るとか、人の目をかすめて何かごまかすような人に、心が悪いとか精神状態が悪いと言うんですけれども、私の言う精神状態が良くないということは、神様の心に反するということなんです。

例えば、寒いのに薄着をして冷え込むとか、不規則な飯の食い方をするとか、くだらないことに神経を使つて頭にのぼせ上がるとか、要するに病気になる原因を自分で拵えておる。自分で病気になるんだから、自分の体一つ自分で守りが出来ていないということなんです。それが神様の心、神意に反するという意味です。

病気になるれば我が身が辛い。「ねどころ」と、昔から言うんですが、要するに「寝床牢」の中に入れてしまふ。自分で作つた罪で自分が牢屋に入っているということでありますから、病気になるということとは恥だと思えと、もう昔からそういうように口では言ってきた。それで大倭の子供達は、仮に病気になるでもかっこ悪いという気持ちがあるんで、出来るだけ我慢して仕事もし、頑張つてくれておるんです。やはりそこに、一つの精神的な迫力というものが出来て来て、少々病気になるっても、それに打ち勝つ気力というものも反面養われておるといふ結果になるんですから、かえつてそういうような言い方も、また効果があることになるんです。

大倭の大本宮におる者は、いかなる仕事をしていても、全部、宗教というものと直結しておるんです。工場仕事をしていても、或いは畑におつても、どこにおつても、大倭の人間として恥じない人間になるんだといふ修養を兼ねていなければいけない。また、いろんな面に於いて社会の人達をこれからリードして行くという、一つのお役目

があるんですから、まあ、そういうつもりで現在修養してもらつておるんです。

信仰というものは、ただ神さんを一生懸命に拝めばご利益をくれるんだというようなものでなしに、大倭のいき方というものは、どこまでも自己修養が第一です。神様の道に於いて自分の心、自分という人間を造り上げて行くんです。

今月四月は特にすきのお祭のあつた月でもございます。壁土に入っている寸紗の緒のようなお役目としての心と心の結び、社会の人に対しての思いやりについて考えてほしい。

それが元となつて、既に目の前にある大倭安宿苑とか、次に県立で出来る精薄児施設（※登美学園）のように、社会福祉事業の形としてこの大倭の一面に姿を現して来る。これはやはり、光明皇后の精神が我々大倭一門の心の中に生きておるが為で、私としては非常にめでたいことなんです。

全世界、仏教では閻浮堤と言います。その全部が仏になる、国土成仏すると仏教でも言っておりますように、社会全体が幸せになるよう、この地上に人間の本当の楽土というものを建設していくというのが我々の理想であるんですから、ただ自分一人だけの幸せを祈らないで、社会の人と共に幸せになろうといふ社会福祉の精神というものを、他の宗教よりも一段と大倭に於いては高揚してほしい。そのつもりで皆さんも信仰を続けて頂きたいということをお願いする次第です。

（注）その後、「県から特別養護老人ホームの要請があつた。然しこれ以上の負債は恐ろしく思つて数回断つた。県では登美学園用地に提供された土地を県が買収するからそれを資金にという話になつたので、救護の南隣接地を買収してここに設置することができた」。

『安宿の餘香』中の法主様の文章より

源流の森案内講座報告(3)

## 森との交感の中で

岸田 哲

はじめ読んで下さる方のためくり返しておくと、この報告は、吉野川 紀ノ川源流に位置する「水源地の森」と呼ばれる広大な原生林の案内人（インタープリター）を養成する講座に筆者が参加した体験を記したものである。今回が最終回であるが、昨年の秋に行われた三回の講座についてまとめて報告しよう。

クライマックスは、何と言っても、自分達で作成したプランで三十名あまりの参加者を源流の森に案内した十月三十日の体験だった。

我々八人の新米の案内人は、森の動植物について参加者自身の目で発見してもらうことを目的とした班と、森の魅力を直かに肌で感じてもらうことを目的とした班の二班に分かれ、参加者には希望の班を選んでもらった。

筆者は、後者の「感じる班」の案内人として、「森と人との響鳴」というこの班のテーマに添って、参加者と一緒に森や溪流を歩き、気に入った葉っぱや石などを見せ合うゲームをしたり、「オーム」という言葉<sup>ことば</sup>を皆で声を合わせて谷に響かせたり、さまざまな工夫をこらしながら一日を過ごした。参加者の人達が森の魅力にひかれて、少しずつ表情が変っていくのが実感できた。森を渡る風や溪流の水音の響きなどに包まれて、「森の時間」という非日常の世界にワープした充ち足りた時間だったに違いない。後から送られてきた感想に、「森に触れた感動を引き立ててくれた企画が最高でした」という一文もあり、ホッと

したものである。

最終回の十一月二十六日にローソクの光の中で手渡された修了証書がユニークだった。森の写真をバックに、次のような文章が記されていた。

《……これからも、インタープリターとして、あなた自身として、自然とふれあう楽しさや面白さ、発見する喜び、不思議さ、畏敬の念、自然とともに生きることの大切さを忘れず、自然のメッセージを多くの人とともに分かちあいながら伝える、森の仲間であって下さい。あなたのインタープリテーションが、多くの人をキラキラ光る笑顔へと導くことができますように。……》

今回の六回の講座に参加して、森の案内人になることはまだまだ無理としても、原生的な森の自然にふれることで、たくさんのかんことを身をもって学んだ気がする。



ひとつは、自然の生命力の大きさ、多様さ、厳しさを肌で感じたことで、時にはあらあらしい顔を見せる自然の息吹を、古代の人たちが童神とかカミとか畏怖したことを実感できた。同時に動物も植物も、いのちあるものすべてが人のいのちと同等に尊いということも、ひしひしと感じざるをえなかった。こうした自然への畏敬や共感の念を

伝えるのも案内人の役割りだと思った。

さらに、水滴が森の奥の苔からしたり落ち、合体して溪流となり、やがて海に運ばれ、さらに水蒸気として空に昇って雨となり、地上に戻ってくるといふ水の大循環が、地球の生命にとって本質的なものであり、そのためにも豊かな森を守ることがわれわれ人間にとっても死活問題であることを肌身で理解せざるをえなかった。

また、今回の体験は、自分の中に思わぬ広がりを生み出した。本紙にもよく登場する、自然愛好家で両棲類、爬虫類の研究者である井手泉さんが行なっている溪流性赤蛙の調査に同行して、源流の森に何度も通うようになり、この森との交流がいつそう深まった。さらに、この講座の初回でアメリカインディアンの土着文化を紹介してくれた松本正さんが主宰する、スウェットロジジ セレモニーという、いわば「インディアン流みそぎ」とでもいえる

儀式に参加して、自然の生命力とのつながりを回復する彼ら流のやり方に強い感銘を受けたりした。

いずれにせよ、源流の森とのつき合いは当分続きそうである。

(ひとまず  
最終回)



風ぐるま

神さま、仏さま、出番です

大阪府茨木市

杉

浩史(63歳)

◆日本の宗教が宗教としての活力を失って、随分久しくなるのではないか……と感じている。私は若い時に、社会の不条理、不公正に限りなき憤りを覚え、及ばずながら、社会変革に情熱を燃やした時期があった。そしてその事に、限界を感じた頃、目の前に立ちほだかり、のめり込まざるを得なかったのが、他ならぬ宗教であった。

思えば二〇世紀は正しく、革命と戦争の世紀であったと言われる。共産主義というイデオロギーが勃興し、そして滅んだ。それに勝利した資本主義にしても、様々な格差と歪みの中で、その命脈をいつまで保ち続けるのかは、定かではない。

その点、宗教はどうだろう。仏教にせよ、キリスト教、イスラム教にせよ、一三〇〇年から二五〇〇年の歴史を刻み、今も敢然と生き抜いている。万物に霊が宿ると考えるアニミズムに至っては、その歴史は、数万年にも及ぶ。様々なものが、生まれて消えてゆく人類史の中で、宗教は決して消滅することが考えられないものの一つである。

しかしその宗教が今、とりわけこの日本では危ない時期を迎えているのではないだろうか。端的に言えば、これが私の現在の問題意識である。

◆一昨年(二〇〇四年)のイラク戦争初期に発生した日本人、男女三名の人身事件、橋本内閣時代(一九九六年)のペルーの日本大使公邸占拠事件、などを記憶されている方はたくさんおられることと思う。こうした時に、それぞれの地で宗教者が重要な役割を果たしたことに、私は深い関心を持つている。今、この日本で、この役割を、果たし得る八宗教者Vが、有り得るのだろうか。

かつてこの日本にも、その時々の人々の心と魂を揺さぶった宗教上の先達は、歴史上、数多、存在する。あの聖徳太子もそうだし、真言宗の空海、天台宗の最澄、鎌倉仏教の法然や親鸞、栄西、道元、あるいは日蓮。こうした知的巨人を鑑みる時、私自身はその偉大さに、ただただひれ伏す。だが、たつた今、そうした宗教者の言葉が、現代の日本人の心にどれだけ届いているのだろうか。

◆今、日本では、私達の社会にとつて、あるいは人々の心の有り様にとつて、肝心且つ要の宗教という八錨Vを荒波にもぎ取られて、社会全体が漂流している。数多、発生する小児、幼児、乳児達を危める何ともやり切れない数々の事件……。あつてはならないことだが、物取りとか、恨みとか、人を危めるに足る動機があれば、一応理屈としては成り立つ。ところが、何の恨みも無ければ利益も生まない八突然、乳児の頭に包丁を突き立てて命を奪うVと言つた理屈の成り立たないことが、余りにも多過ぎる。

今を去る九五年三月には、オウム真理教による地下鉄サリン事件が発生した。この特異な事件と、それを取り巻く社会現象はどのような意味を投げかけているのだろうか。人々を無差別テロの恐怖に陥れた宗教集団による未曾有の事件に、日本社会は八宗教者Vも含めて、適切なる指針を与えているとは、言い難い。そしてこの事件は風化し、人々の心の中から、通り過ぎようときえ、しているように見える。もしかして、そうだとすれば、日本での宗教の復権は、およそ覚束ない。私は何よりもこのことに危機感を覚える。

◆過去、日本では、信仰上の違いによる実力を伴う宗教紛争(＝戦争)は、殆んど聞かない。と言うか、寡聞にして私は知らない。古くは、仏教を取り入れようとした蘇我馬子と物部守屋との諍い、近年では維新後、天皇というものを神にデッサン上げるための愚かな政策「廃仏毀釈」くらいなものである。しかもこれとて、中味をよく吟味して見ると、異文化の受け入れ時に発生したある種の混乱であり、純然たる宗教間紛争とは言い難い。信長の叡山焼き討ちや家康のキリシタン弾圧は、為政者の政策の都合であり、これもまた、およそ宗教間紛争ではない。

◆先日、私は熊野那智大社を訪れる機会があつた。ここは、西国三三ヶ所、第一番札所である青岸渡寺とが、仲良く並んで鎮座している。ここでも神と仏を対立軸としては考えない日本人の大らかさと智慧が見事に結実している。そう言えば、一昨年(二〇〇四年)には、日本仏教の最高峰の一つ八高野山Vと、神々の集う八熊野三社Vとを結ぶ古道(修験道)が、世界から高い評価を受けた。ところがこの大らかさとその智慧の影で、決して無神論ではない、宗教的無関心論の侵食が、進行している。ここに現代日本の宗教事情上、極めて深刻な事態の断面が覗く。神も仏も、渾然として受け入れる日本人の智慧は、こうした土壌の中で育まれたと言えるが、これは無関心と表裏一体なのが、いかにも悩ましい点である。

日本の宗教は、宗教の陥りやすい排他性を越えた大らかさを保ちながらも、蔓延し切つた無関心と言う壁の向こう側まで、何としてでも到達しなければならぬ。そして宗教と言う八錨Vをしつかりと社会の根底に、再び根付かせる作業に取り掛かねばならないと、及ばずながら、私は考えるのである。

# 時の波蕩(その十七)

## 長い間ありがとう

林 修三

その花の名前は知らない。  
春になるといつも通うバス停迄の路傍に咲く可憐な小さな花。春が過ぎると何時とはなしに忘れ去り、又春が来ると発見し、心癒される花。

今年の三月下旬のある日、岸田哲さんから『とおやまと』紙の「寸紗」の取材を受けた。取材というより、親しい方に聞いていただく私の来し方の記録の様なものだった。語りながら、

何が遠ざかり、やがて消えていくのを感じていた。何かを追い求めて来た人生。でもそれは必要以上のものに肥え太り出した私自身の心の発見でもあった。生まれてからこれ迄、何もかもが初体験の連続の様な人生で、必要以上の焦りや恐怖が植えた虚飾や驕りの数々。それら巡り会えたすべてのモノ達に別れを告げ、本当に新たな一日を始める為の何か……。得る事ではなくて、捨ててゆく事……。

精神の堂堂巡りの様な私の向こうに、そ

【おやまと】 佐渡市 大滝 哲也

日本海に浮かぶ佐渡島。我が家は、その南部に横たわる山脈の山あいにあります。標高約二五〇メートル、気温は平野部より更に一〜二度程低く、降雪量も多いので、冬は雪に閉ざされます。

毎年二月下旬から三月上旬、まだ雪が厚く残る頃、庭の半畳程の池へ、下を流れる溪流から下水溝を伝って山椒魚が産卵のためにやって来ます。

水面に浮かぶ小枝に産み付けられた小指大の白い卵囊は、日毎に膨張して鶏卵大の透明な寒天の

ろそろ、その何かを見てみたいと思う。

やっと到り着いた「大倭」の心を心として、私なりの日常を深く生きる、その旅立ちがはじまるかもしれない。気がつけば、幼い時から親しんでいた花や樹や、刻々とその姿を変えて空を往く雲達が、相も変わらず私に呼びかけていてくれる。今朝も目覚め、通勤へのあの道を行こう。あの花達にめぐりあえる様に。

今も私は、その花の名前を知らない。

長らく連載していただいた私の「時の波蕩」は、今回をもつて一応の終了とさせていただきます。

「読んでるヨ」と声をかけて下さった方々、ありがとうございます。励みになりました。好き勝手に書いた私の拙い文章の数々を載せていただく機会を与えて下さった『とおやまと』紙の皆様、ありがとうございます。そして、この文を読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。ごさいました。

### 移りゆく

時の波蕩を 見つめおる

我も流れて

時のまにまに

.....  
ようになります。四月下旬には、その中の黒いオタマジャクシのような十数個の卵が孵化し、この子供達にやがて手足が生えてきます。

梅雨の大雨で池の水が溢れると、子供達はその流れに乗って激しい大自然へと旅立つて行きます。

かつては地球上に満ち溢れていた恐竜が急速に滅び、今度は人類が満ち溢れている一方で、細々とですが絶えることなく、山椒魚は環境に適應しながらこの営みを繰り返しているのです。

私も合成洗剤ではなく木灰で食器を洗います。

表紙絵について

## 両界曼荼羅

大阪府豊中市 森脇聖淳

平成元年、斎戒沐浴し描き続けて半年やつこのことで、完成させて頂いた両界曼荼羅絵です。

サイズは各々 75×84cmです。

写真右、胎蔵界曼荼羅には414尊。

写真左、金剛界曼荼羅には1461尊。

米粒ほどの大きさの仏様が無数に描かれてます。

曼荼羅と言う言葉は、梵語のマンダラの音訳した言葉であり、梵語で壇の意、体系を意味します。密教の複雑な教義を図式にしたものであり、胎蔵界は、大日経。金剛界は金剛頂経に基づきあわせて密教の宇宙観を具体的に表示するものです。

曼荼羅にはきわめて深奥な哲学が内在し、ごく大まかに言うと胎蔵界曼荼羅は生成の世界。金剛界曼荼羅は理論の世界の構成を表現するものであり、原因と結果あるいは慈悲(胎蔵界)智徳(金剛界)を表します。胎蔵界は中台八葉院を中心として四重にならぶ十二院からなり、金剛界は縦横共に三列に区別した九会から形成されています。

『とおやまと』の表紙に私の描いた拙作が掲載されるなんて、これも鈴月かあさんの甥という特典からなんでしょう、心豊かなとおやまとの皆さまに心より感謝します。

ちなみにこの絵は横浜 保土ヶ谷の円福寺に所蔵されています。お近くの方はご覧下さいませ。

<http://butsuma.net/>

# A W T C 日誌

## 第289回 大倭会文化行事 新緑の亀岡・出雲大神宮

亀岡盆地の神奈備・御蔭山の麓  
出雲大神宮で一日を過ごす。

日時 平成18年5月21日(日)  
午前10時30分集合

場所 出雲大神宮 社頭

交通 (奈良方面) 近鉄学園前にて快速7時58分  
発に乗り西大寺8時1分着、8時9分発京都  
行急行に乗り京都8時49分着下車、JR京都  
駅33番線から9時17分発に乗り亀岡9時51分  
着、駅前から「亀岡ふるさとバス」川東コー  
ス10時15分発に乗り10時28分神社前下車  
(大阪方面) 大阪駅8時30分発新快速に乘  
り京都8時59分着、以下同じ

ルート 社の境内で説明を聞き境内・山麓を散策。

(昼食持参 小雨決行)  
世話人 湯浅 芳郎 自宅 0742-48-3389  
携帯 090-6987-5847

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月14日 千葉県市川市の島村  
香代子 熊川志津子姉妹が来邑  
されました。

引き続き、教務本庁で勉強会  
も行われました。

3月19日 第287回文化行事

夜、交流の家でF I  
WC定例委員会。国分伸浩さん  
(同志社大大学院 中国留学中)  
に替わり、緒方健太さん(神戸  
大大学院)が新委員長に決まり  
ました。

声は、文字とは

3月18日 夜、交流の家でF I  
WC定例委員会。国分伸浩さん  
(同志社大大学院 中国留学中)  
に替わり、緒方健太さん(神戸  
大大学院)が新委員長に決まり  
ました。

法主さんの肉

3月19日 第287回文化行事  
で洛北の崇道神  
社、蓮華寺、三  
宅八幡を訪ねま  
した。参加者29  
(内小人1)人。  
(詳しくは5月  
号で報告予定)  
3月23日 大倭  
大本宮月次祭。  
この日は昭和37  
年3月23日の法  
話テープをお聞  
きました。

3月28日

3月末で大倭殖産(株)東京支  
店が閉められるため支店長の伊  
藤壽郎さんが来邑、各部署に挨拶  
をされました。

3月28日

夜、横浜市大大学院生の永飯  
まゆり 高野瞳さんが来邑、ダ  
ンボール一杯に大倭の古い新聞  
などを収集して30日夜帰りました。  
永飯さんの妹、あづみさん  
も一緒。昇ちゃんは大にここに  
で、紫陽花邑のホスト役?

3月24日

大倭安宿苑では  
3月24日 大倭墓地で住苑者  
職員が慰霊祭を行いました。

4月3日

46名の職員が採用や  
異動、職名変更の辞令を受けま  
した。主な異動では、矢追明昌  
さんが事務局長、八重垣園施  
設長に、岸田哲さんが長曾根寮  
施設長に、山本栄二さんが新設  
の奈良市富雄地域包括支援セン

5月6日

午後2時より  
大倭神宮にて。

5月14日

午後2時より  
大倭大本宮拝殿にて。

5月15日

午後2時より  
大倭神宮にて。

5月23日

午後2時より  
大倭大本宮拝殿にて。

3月11日 「捨石の会」と名づ  
け、脳の活性化やまた「立教開  
宣文にある「ともに世界平和の  
捨石となろう」の心を知りたい」  
との志で、今まで基石には触  
れた事の無いようなメンバーば  
かりですが、紫陽花邑の有志が  
囲碁の会をつくりました。

3月12日 禊会。屋久島の手塚  
賢至さんが久しぶりに、姫路の  
李敬烈さんに勧められたという  
別所りか(枚方市) 長谷川玲  
子(西宮市)さんが初めて参加。

3月23日 大倭  
大本宮月次祭。  
この日は昭和37  
年3月23日の法  
話テープをお聞  
きました。

3月19日 第287回文化行事  
で洛北の崇道神  
社、蓮華寺、三  
宅八幡を訪ねま  
した。参加者29  
(内小人1)人。  
(詳しくは5月  
号で報告予定)

3月25日 あじさいの箱の第26  
周年総会が奈良市内の共済会館  
「やまと」で行われました。各  
地から久しぶりの人もあり参加  
31人。且田  
容子代表挨拶、  
活動  
会計報告、  
矢追美壽紀  
大倭安宿苑  
理事長挨拶  
摺、食事と  
全員の近況  
報告、出し  
物等で盛り  
上がり、そ  
の後奈良町  
散策。

4月6日 大倭神宮月次祭。  
夜、大倭会館で邑倭の会。  
4月8日 午前11時より、須佐  
緒祭が開かれました。折よく桜  
は満開、拝殿の底に机を並べ口  
まつりを楽しみました。何十年  
か前、法主さんが植えておいて  
下さった桜の木です。

夜にはライトアップもされて  
鏡池に映る花を愛で、昼からず  
つとお酒と縁の切れない人もい  
たようです。

4月9日 禊会。参加者それぞ  
れの今の心境をテーマに、笑い  
も絶えないけれど真剣な雰囲気  
でした。原章さん(奈良市)が  
久しぶりに、末広政憲さん(豊  
中市)が初めて参加。

その後、勉強会もありました。  
入学・卒業 築林篤夢君が小学  
校に、竹本謙祥君 大橋家利  
君 反保玲奈さんが中学校に、  
中島知佐登さんが高校に、中島  
木綿貴さんが専門学校に、それ  
ぞれ入学しました。

3月22日 家族 近隣自治会  
長 長曾根寮住苑者、ポランテ  
ィアの皆さんの参加を頂き、地  
域交流会を催しました。目の前  
で握る屋台寿司が格別。

3月22日 俳句クラブ。「雛ま  
つり琴の音流る老いの園」「薄  
緑芽柳垂れる池の端」

3月22日 増改築工事の竣工式  
が行われ奈良県知事の挨拶もあ  
りました。  
(菅原園)  
3月29日 日頃から作業をして  
くれている住苑者の労をねぎら  
う集いを催しました。  
(長曾根寮)  
3月15日 長曾根寮厨房より出  
火想定で法人合同防災訓練。  
(八重垣園)  
3月21日 家族 近隣自治会  
長 長曾根寮住苑者、ポランテ  
ィアの皆さんの参加を頂き、地  
域交流会を催しました。目の前  
で握る屋台寿司が格別。



# A T M i C

\* 月次祭(大倭神宮)

5月6日(土) 午後2時より  
大倭神宮にて。

\* 大倭会主催第四五〇回禊会

5月14日(日) 午後2時より  
大倭大本宮拝殿にて。

\* 月次祭(大倭神宮)

5月15日(月) 午後2時より  
大倭神宮にて。

\* 月次祭(大本宮)

5月23日(火) 午後2時より  
大倭大本宮拝殿にて。